

■第二十章 組み合わせ（複合 Combination）の考察

この章では実体論者がとなえる、実体としての第一原因と副次的な諸原因との組み合わせで結果が起きてくるという考え方に対する反論がなされている。因果関係というものを論理の形式として考えるのではなく、また、人間が行う理由づけに先立つ原理として考えるのではなく、因果関係がなぜ起きるか、原因がなぜ結果を引き起こすのかというメカニズムを説明しようとする者がいるのである。こうした原因の原因ともいふべき発想は今日では完全に退けられているのであるが、ナーガールジュナはそうした考え方を相手に反駁する必要があったわけである。反論にあたっては主に、原因と結果の間の時間的前後関係の分析という手段を使っている。

1. もし原因（因）と条件（縁）1の
組み合わせから生じるものとして
結果がその組み合わせの中に存在するのなら
それはどのようにその組み合わせから生じ得るといふのだろうか

1. 意識

もし本質的な生起の力を持った原因と、関係性に依存して説明される因果関係としての原因の両方の組み合わせから生じるものとして、結果がその二種の原因の組み合わせの中にあらかじめ本質として存在しているといふのなら、結果はどのようにその原因の中から生じる得るだろうか。

1. 原因 cause と条件 condition はどちらも意味としては「原因」と訳されるものであり、条件という語は誤解を招く恐れがあるので、訳としては今まですべて「原因」に統一してきた。しかしここでは実体論者の立場に合わせて両方の語が使われているので、「条件」と書かざるを得ない。原因（因）の方は結果を引き起こす本質的な力というものを想定した場合の原因のことであり、実体論者の言葉であってナーガールジュナは受け入れていない。条件（縁）の方はそうした実体性を排除した、ごく普通の意味で因果関係に依存するという場合の原因であり、因果関係を概念に依存する関係性の問題だと解釈する中観派も認める意味での原因である。詳しくは第一章の注 1. を参照。

2. もし原因（因）と条件（縁）の
組み合わせから生じるものとして
結果がその組み合わせの中に存在しないなら
それはどのようにその組み合わせから生じ得るといえるのだろうか

2. 意識

もし本質的な生起の力を持った原因と、関係性に依存して説明される因果関係としての原因の両方の組み合わせから生じるものとして、結果がその二種の原因の組み合わせの中にあらかじめ本質として存在してはいないというのなら、結果はどのようにその原因の中から生じる得るだろうか。

最初の二つの詩は原因と結果の関係を本質を持ったものとして見ようとする実体論者に対する挑戦の言葉である。そして以下に続く詩で、その個々の場合の問題点を検討して行くことになる。

3. もし結果が
原因と条件（因縁）の組み合わせの中にあるなら
それはその組み合わせの中に把握されなければならないはずである
しかしそれはその組み合わせの中には理解されないのである

3. 意識

もし結果というものが、原因（と条件の組み合わせ）の中にあらかじめ本質的に存在しているのなら、それは当の原因の中に理解されなければならないはずである。（つまり原因自体が結果である、原因と結果は同じものであると理解せざるを得ない。）しかし（仮に火の原因が燃料だとしよう、火を見ることと薪を見ることは一緒だろうか。違うであろう。したがって）原因（と条件の組み合わせ）の中に結果は理解されないのである。

4. もし結果が

原因と条件（因縁）の組み合わせの中にはないなら

実際の原因と条件は

原因でないもの noncauses、および条件でないもの nonconditions、のようなもの
となるだろう

4. 意識

もし結果というものが、原因（と条件の組み合わせ）の中にあらかじめ本質を持って存在してはいないなら、実際の原因とか条件とかは、「原因でないもの」とか「条件でないもの」と呼んでも同じはずである。（どのみち結果はどこにもあらかじめ存在してはいないのであるから、原因となるものは、結果からみてどこに存在していても同じであり、結果になんら関係ないものであっても原因と呼んで差し支えないし、それと本来原因と目されるようなものとの間には何の違もないことになるだろう。火の原因を燃料だと言っても、水だと言っても違いはないということである。）

一般に実体論者は、原因の中に結果があらかじめ存在していることによって、原因が結果を生み出す力を持ち得ると説明するのである。それが本質的な因果関係の力というものの説明である。しかしナーガールジュナと中観派の考えは、因果関係というものに本質性、実体性というものを想定しない。因果関係とは依存的な関係性それ自体であり、因果関係についてのさらなる説明は不要なのである。換言すれば、因果関係それ自体が説明の形式であり、我々はその因果法則という形式を用いずしては説明ということそれ自体を行ない得ないからである。因果関係を説明するためには因果関係の外に立たなければならない、と現代の哲学者ならば言うであろう。²

2. ウィトゲンシュタインはこう表現している：

「論理形式を描写しうるには、われわれはその命題とともに論理の外側に、すなわち世界の外側に、立ちうるのでなければならない。」 論理哲学論考 4・12 野矢茂樹訳
岩波文庫 pp.52-53

5. もし原因が、その結果を現すに際して
原因としての地位 causal status を失うのであれば
二種類の原因というものが存在することになる：
原因としての地位を持っているものと、そうでないものと、である

5. 意識

もし本質的な第一の原因が、結果を表した瞬間に原因でなくなるのであれば、二種類の原因が存在すると言わざるを得ない。原因としての地位を失うものと、失わない第二原因と、である。（たとえば芽と種の関係で言えば、芽が結果だとすると種は本質的な第一原因であり、発芽すれば種は消えるのである。しかし芽が出るためにはさらに、土壌や水、空気、光などの条件が第二の原因として存在していなければならない。（原因が二つ以上存在してしまうということになる。）

実体論者の一般的な見解では、本質的な第一の原因に依存して結果が生じるが、その第一原因が有効であるためには、それを支える条件――第二、第三の原因――との協同関係が必要である、とする。ナーガールジュナはそうした見方に異論をとなえているのである。

6. もし原因が、まだ結果を生み出し終わっていないうちに
消滅するなら
そして消滅した原因から（結果が）生じたなら
結果は原因なしに存在していることになるだろう

6. 意識

もし本質的な第一の原因――たとえば種――が、まだ結果――たとえば芽――を生み出し終わっていないうちに消滅するというなら、そしてその消滅してしまった原因から結果が生じたというなら、結果は原因がなくても生じたと言えるだろう。

7. もし万一、結果が（原因と条件の）集合したものの collection と同時に生じることがあるのなら
生み出されたものと生み出すものが
同時に生じることになるだろう

7. 意識

反対にもし万一、結果――たとえば芽――が、複数の原因（原因と条件の集合したものの）――たとえば種と土壌、水、など――と「同時に」生じる瞬間があるというならば、生み出された結果と生み出した原因とが同時に存在していることがあり得るということである。（原因と結果が並んで存在しているとき、どちらが原因でどちらが結果なのだろうか。）

8. もし万一、結果が（原因と条件の）
組み合わせられたものの combination に先立って生じることがあるなら
原因と条件なしに
結果が理由もなく生じることになるだろう

8. 意識

さらにもし万一、結果――たとえば芽――が、複数の原因（原因と条件の組み合わせられたもの）――たとえば種と土壌、水、など――より前に生じることがあり得るなら、原因（と条件）なしに結果が理由もなく生じることになるだろう。

9. もし結果というものが、原因が消失している状態での
原因の完全なる変質 complete transformation というものであるならば
先立って生じていた原因が
再度生じることもあり得ることになる

9. 意識

（これに対してあなたがたはこう反論するかもしれない。原因としての種と結果としての芽とは別個のものではない。実体である原因がまず存在していて、その原因たる種が芽へ

と完全に変化しただけなのである。したがって別々のものが時間的に前に存在したり後に存在したりするというような問題ではないのである、と。しかし、実体が見かけの上で何か他の形に変化するということを仮に受け容れるにせよ、)もし原因――たとえば種――が(見かけの上で)消失した状態で、結果――たとえば芽――が(生じるのであれば、つまり、その実体である原因が見かけの性質を完全に変化させただけのもので結果が)生じるのであれば、先に生じていた原因――種――はまだ実体としてその本質を残しており、それがもう一度生じるということだってあり得るのではないだろうか。

わかり難い議論である。解釈も色々と分かれる可能性があるだろうか、中観派の一般的な解釈としては上記の意識のようなものとなる。反論者が原因と結果をそれぞれ別々の実体だとは考えず、なおかつ本質的原因というものが結果に対して潜在的に、実体として存在していると考えている場合のナーガールジュナの反論なのである。この場合「変質」という言葉は、変化する前の本質(原因)が潜在的に持続していることを前提にした言い方となっている。

10. どうしたら原因は――消失、解消されてしまうものでありながら――生み出された結果として生じ得るといえるのだろうか
どうしたら原因は――もし原因と結果がともに存続しているならば――それが生み出した結果と結合され得るといえるのだろうか

10. 意識

もし原因というものが、結果が現れた時点で消失してしまっていて存在しないものであるならば、(存在の時点が重ならないもの同士でありながら、)なぜ原因が、そこから生み出された結果を生じさせることができるのだろうか。反対に、もし原因というものが、結果が現れた後にも存続していて、結果と同時に存在していただけるようなものであるなら、なぜその原因が、同時に存在している結果と因果関係として結びつくなどと言えるのだろうか。

ナーガールジュナは原因と結果というものを時間の問題として分析して、原因が結果より前に存在しているとか、同時に重なり合って存在しているとか論じることはできないと

考えている。因果関係は論理の关系的な形式であって、認識の基礎として時間というものを前提にするにせよ、時間の中に物のように配置されたものではないのである。原因と結果の間に何らかの結合手のようなものが介在しているという説明は余分な説明である。ナーガールジュナはここでそうした考えを持ち出して、彼らが前提として必要としている時間的前後関係という思考そのものを用いて反撃しているのである。

11. さらに、もしその原因と結合されていないならば

どんな結果が生じ得るといふのであろうか

生み出された結果は

原因によっては観察されたこともなく、されなかったこともないのである

11. 意識

さらに、原因と結果が因果関係として結びついていないとしたら、そのような関係からどんな結果が生じ得るといふのだろうか。（以上のことからこう言えるのである。）生じたものである結果というものは、原因と同じ時に存在しないので原因から見て観察不可能なものだとか、原因と同時に存在する瞬間があるので原因から見て観察可能なものだとか言うことのできないものなのである。

原因と結果は、結果の方が原因より前にあったとは言えないにせよ、時間的に前だとか後ろだとか同時だとかという分析によって解明できるようなものではない、と、前の詩からの論議の結論を述べている。因果関係というものは、物が生じることについて人間が考える場合の唯一の方法なのである。その方法自体については、その方法を用いずには分析できない。

12. 過去の結果と

過去の原因、生じていない *nonarisen* 原因

もしくは生じた *arisen* 原因との間の

同時的なつながりということは断じてあり得ない

13. 生じた結果と
過去の原因、生じていない原因
もしくは生じた原因との間の
同時的なつながりということは断じてあり得ない
14. 生じていない結果と
過去の原因、生じていない原因
もしくは生じた原因との間の
同時的なつながりということは断じてあり得ない
15. つながりなしに
どうやって原因は結果を生み出し得るといえるのだろうか
つながりがある場合
どうやって原因は結果を生み出し得るといえるのだろうか

12. ～15. 意識

過ぎ去った結果であろうと、生じた結果であろうと、生じなかった結果であろうと――どんな結果であれ「結果」というものが、――過ぎ去った原因であろうと、生じた原因であろうと、生じなかった原因であろうと――どんな原因であれ「原因」というものと同時に存在することでつながっている、などと考えることは断じてできない。つながりがないのに、原因はどうやって結果を生み出せるのだろうか。反対に（同時に存在することで）つながりがあったとして、同時に存在する二つのものがどうして原因と結果という関係であり得るだろうか。

原因と結果というものは依存的な関係のセットであり、それぞれが独立した実体として考えられるようなものではない。これは因果関係は空である、ということである。空とは依存的にしか存在せず、したがって実体ではないもの、ということである。ナーガールジュナは因果関係の空性ということをここで述べていることになる。次の詩の前半はこれに対する反論者の反駁である：

16. もし原因が、結果に対して空であるなら
どうやってそれが結果を生み出すというのだろうか
もし原因が、結果に対して空でないなら
どうやってそれが結果を生み出すというのだろうか

16. 意識

(これに対してあなたがた反論者はこう言うに違いない。) もし原因というものが結果との依存的な関係に過ぎず、空であるというなら、どうしてそんな自立的でないようなものが結果を生み出せるのだろうか。(それについてはその言葉をそっくりお返しすることにしよう。) もし原因というものが結果との依存関係に過ぎないようなものではなく、空でないというなら、どうしてそんな自立的なものが結果を生み出せるのだろうか。

空であるがゆえに生じる、というのは中観派の基本的な考え方である。第一章でもナーガールジュナはそのことをすでに議論してきている。

17. なんであれ a 空でない nonempty 結果は生じることがない
そのような the 空でないものは消滅しないであろう
このように this 空でないものは
消滅していない nonceased ものであり、生じていないもの nonarisen であるはずだ

17. 意識

結果というものも空でないならば(、つまり依存的なものでないならば)、それが生じるということはないし、消滅するというものもないであろう。(空でないものは実体であり、実体というものは、ある時点から生じたようなものではなく、何にも依存せずに最初から生じていて変化せず、したがって消滅することもなく永遠にその本質を持ち続けるようなものである。そしてそのような実体は存在しない。そのように) 空でないものは、生じず滅しないものであるはずだ。

16. の詩で主張されたような空である原因から、空でない結果が生まれるということは

ないのである。原因も結果も空であり、お互いに依存的な関係のあり方に過ぎないということである。

18. どのように空なるものが生じ得るといのか
どのように空なるものが消滅し得るといのか
したがって空なるものはまた
滅してないもの nonceased であり、生じてないもの nonarisen でもあるだろう

18. 意識

空なるものが生じたり、消滅したりすることがあり得るだろうか。（そんなことはあり得ない。）したがって空なるものは、生じてみず、消滅してみないものであるはずだ。

この詩も解釈が難しい。空であるがゆえに事物は生じるとナーガールジュナが前の詩で主張していたことと正反対のことを主張しているので、これは反論者の主張に違いないと考えたくなるかもしれない。しかし中観派はこの詩もナーガールジュナ自身の主張だと解釈している。前の 17. の詩は現象的な見地（世俗諦）に立って言ったものであり、この 18. の詩は究極的な見地（勝義諦）に立って言ったものだということである。しかしこの解釈を取る場合は注意しなければならないことがある。それは、究極の見地というものは言語概念と論理によって――仮にそのように名付けるにせよ――表すことのできない形而上の見方だからである。論理を用いて論理を超えたものを（「論理を超えたもの」と仮に名付けることはできても）説明することはできないように、究極的な見地に立った見方を言葉で主張することはできないはずである。したがってこの詩で主張されている内容は、瞑想等で得た直観的な理解を、過ちを覚悟でとりあえず言葉にしてみたものだと考えることになる。

現象世界では空であるがゆえに生じるが、究極の見方では空なるものは生じないと言う。これを、「言葉を超えた世界（形而上学的な認識）は本来、言葉で空とか表現することすらできない、したがって空というものはないのだ」――このように解釈すれば一応は筋が通るように見えるだろう。しかしそうした物言いは、言葉を超えた世界を知っている者が、仮にではあれ、再度それを「言葉で」表現していることなのである。こうした究極

的眞実を言葉において扱う際の紛らわしさは、ガーフィールドの解説に端的に現れている。ガーフィールドは中観派特有の言い回しを擁護する側に立っているが、そうした伝統的な説明はわかりやすいものではないかもしれない。3

19. 原因と結果とが同一である
 ということは納得できないからである
 原因と結果とが異なっている
 ということも納得できないからである

19. 意識

原因と結果が実体として独立して存在しているようなものであり、それらが同一であるというような考え方は納得できないからである。原因と結果が実体として独立して存在しているようなものであり、それらが別々のものであるというような考え方も納得できないからである。

3. 以下が全文である：

ここでナーガールジュナは空性の存在論における二面性を強調している。現象的な（世俗諦の）存在が空であるがゆえに常に生じ、滅し続けているとしても、究極の観点（勝義諦）からすればそのものの空性は生じず、存続せず、滅しないのである。これは現象的眞実と究極的眞実の解釈に関する雄弁な表現である： この空性の基礎となる根拠が主張されるというそのことが、空性そのものによる理解があり得るということを否定しているのである。事象の空性とは、結局のところ、そのものが時間的に永続しないものであるということを根拠にして主張されるものである。しかしその無常性と、当の無常なるものの存在が空であると主張されるということ自体が、究極の観点からはあり得ないことである。それでもなおこのことは、自己否定というよりも、自己確認を成立させているのである。究極の見地から何らかの事象が明白であるなら、その事象は空でないものであるはずだからである。このことは、こうした議論を確証するような事象は何も存在しないということであり――その存在ではなくて――その（存在しないという）ことによって、致命的な意味で一つの見解へと落ち込むことを防いでいるのである。The Fundamental Wisdom of the Middle Way, Jay L. Garfield 1995 Oxford University Press pp.264-265

中観派の一般的な考えでは、ここでは前の部分での論議が意味として繰り返されていると解釈されている。18. の詩とは今ひとつつながりが良くないようにも思えるが。

20. もし原因と結果とが同一なら
生じたもの produced と生じさせたもの producer も同一であろう
もし原因と結果とが別物なら
原因も原因でないもの noncause も似たようなものであろう

20. 意識

もし原因と結果とが同一の実体だとするなら、生み出されたものと生み出したものと同じだということである。もし原因と結果とが別々の実体だとするなら、（どちらも実体としてお互いに対して特定の関係を持つことが決まっているわけではなく、生み出されたものとか生み出したものとかいう関係は生じない。したがって）原因も、原因でない他のものも、結果に対して何ら変わらないということである。

これも 3. 4. の詩と意味としては同じことを繰り返している。

21. もしある結果が実体性 entitihood を持っているなら
何がそれを生じさせ得たというのだろうか
もしある結果が実体性 entitihood を持っていないなら
何がそれを生じさせ得たというのだろうか

21. 意識

もしある結果が実体（物のような存在のあり方）であるなら、どんな原因がそれを生じさせたと言い得るだろうか。また、もしある結果が実体でないものなら、（あなたがたにとってはそれはまったく生じないものであるはずだ。だとすると）どんな原因がそれを生じさせたと言い得るだろうか。

22. もし何かのものが結果を生成させていない状態にあるなら
それが因果率の性質を持っている attribute causality と言うことは正しくない
もしそれが因果率の性質を持っているとするのが正しくないなら
その結果はどんな性質を持つことになるのだろうか

22. 意識

(実体的な存在は生じさせられるということがないのである。したがってそれが「結果」であるにしても、生じたりはしていないはずである。) もし何らかのものが結果として
(の性質は持っていないながらも) 生じていないものなら、それを因果関係という原理から説明することは正しくないはずである。もしそれが因果率の性質で説明できないなら、その場合の結果とはどんな性質を持つものとして説明されるのだろうか。(それでも「結果」なのだろうか。)

23. もし原因と条件の
組み合わせ(複合)が
自己-生成されたもの self-produced でないなら
どのようにそれは結果を生じさせるのだろうか

23. 意識

(因果関係が実体であるならば、原因も結果も何かに依存して生じるということがないのであるから、結果として生み出されたものは原因でもあり、自らが自らを生じさせるような自己-生成でなければならないはずである。しかしあなたがたが信じるように、) もし原因と条件の組み合わせが結果を生み出すのならば、それは自己生成ではない。それならばどのようにその原因(と結果の組み合わせ)は結果を生じさせるのだろうか。

実体的な一つの原因だけが存在するのではなく、本質的な第一原因と付随的な諸々の第二原因(条件)とが複合したものが結果を生じさせるのだという主張の場合でも、実体論は成り立たない。条件の集合は、集合した部分に依存しているという言い方も可能である。

24. したがって、（条件の）組み合わせ（複合）によって作られたのではなく
また（条件の）組み合わせを除いてこそ結果が生じ得るというわけでもない
もし結果というものが存在しなければ
どこに条件の組み合わせなどというものがあり得るというのだろうか

24. 意識

したがって（本質－実体というものを想定するならば、）結果は複合的な原因によって作られるのではなく、複合的な原因を除いてこそ結果が生じ得るというわけでもない。そんな具合にして、どのようにしても結果というものが生じないというのであれば、本質を持った複合的な原因などどこにも存在しないのである。

因果関係を本質的存在だとみなすことは、いかなる場合でも成立しないのである。本質的な第一原因に補助的な条件が組み合わさって結果が生じると言おうが、因果関係という関係性そのものが本質的存在だと言おうが、何ものにも依存しない根拠などというものは探し出せない。根拠を求めるということは、すでに依存的に考えるということなのである。したがって因果関係にさらなる根拠は不要である。矛盾した相手側の論理に乗った反論であるがために全体を通してわかりにくい物言いであったかもしれないが、ナーガールジュナの結論がここにあることは間違いない。